戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

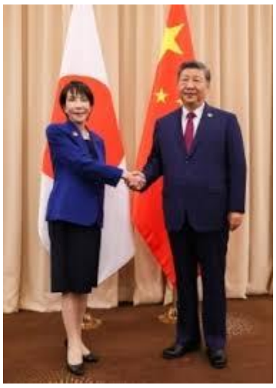
PDF版第8号　2025 年 12 月 &1 月号

12月10 日発行



琉球弧の戦場化を許さない！新宿アクション

【巻頭言】呼び寄せた日中対立の下で高市政権が進める軍事的経済的対中対峙態勢構築に抗し、日本国家の近現代史の総否定を踏まえたまだ見ぬ世界を展望する年に 2026 年をしよう！



友好ムードが一転・・・

高市首相の台湾有事＝存立危機事態発言は、「米軍が介入していない段階で台湾救援に参加するとも解釈しうる。自衛隊が初期の段階で矛として活動する体制への転換を意味する。中国の「核心利益」に踏み込む「一線を超え」ている。日中関係、否、日中対立が今までを超えたレベルに突入することは必至だ。日本のマスコミは、「中国は専制国家だから強がらざるを得ないのだ」といった事情通ぶった解説に終始している。だが、中国側は不退転の立場で臨んでいる。高市発言は、現在・未来につながる中国近現代建国史総体に関わる「核心利益」を損なうものだからだ。

ところが高市政権も、「存立危機事態」発言を支持する民衆も（毎日新聞の世論調査で 50%）、中国をなめている。対外硬を売り物にする高市政権は、それに喝采を送る民衆に縛られ対外硬の看板を下ろせない。いや、高市政権もそれを支持する民衆も、対外硬こそが正しいと信じている。対立の長期化は必至だ。後年、2025 年は解消不可能な日中対立に陥った転換点として記憶されることになるかもしれない。

長期化すれば企業は中国市場を失い、中国からの輸入は細り、それに支えられてきた安価な消費財の物価は高騰する。発言を撤回しないことは、経済的に見れば非合理的選択行動である。だが、対外硬ナショナリズム機運は、非合理的選択に突き進む。

対立激化は、偶発的軍事衝突のリスクを高める。偶発的軍事衝突は、限定戦争、さらには全面戦争へとエスカレーションしかねない。日中両政府は、偶発的軍事衝突のリスクを管理し、偶発的軍事衝突が起きた場合も個別に処理しようとするだろう。だが、個別的に処理されたとしても、偶発的軍事衝突は対外硬機運を一層高める方向に作用する。それが更なる軍拡、さらなる緊張激化を招く悪循環をもたらす。対外的軍事的対峙態勢の強化は、国内的な治安弾圧体制の強化、「非国民」に対する監視や社会的排除、「敵性外国人」の監視・強制退去と表裏一体だ。高市政権の進めるスパイ防止法制定は、この流れに位置する。

軍事的対峙―軍拡は、継戦態勢の構築などを媒介に広範な経済の軍事化を必然的に要請し、軍事化した経済は戦争を糧とする。軍需依存、その究極の形態である戦争経済が、短期的には経済的合理性に適うことになってしまう。高市政権の危機管理投資は、この道を進めるものだ。自衛隊高級幹部＝現代版軍部は、これらによって社会的地位を高め権限と利権を拡大する。軍事的合理性に期待してはならない。軍事の論理自体が非合理的なのだ。

だが、対立激化がもたらす不安と恐怖と対外硬機運が、これらへの容認どころか支持を醸成しかねない。

対外硬の機運には、高市たち政権担当者だけでなく、民衆にも根深く存在する日清戦争以来の中国蔑視、英米に負けたが中国には負けたとは認識していない太平洋戦争史観、旧植民地である台湾に対する旧宗主国意識、日本はアジアで最も早く工業化し経済大国になったといった近代史像、その延長にある日本自体の自由や民主主義を否定する現実を棚に上げた「自由で開かれたインド太平洋」のリーダー気取りの大国意識などと、現実には力関係が中国優位に傾いていることへの苛立ちがないまぜになっている。

こうした意識、歴史像からすれば、発言撤回は敗北だ。それは、短期的な局面的な敗北に止まらない。戦争責任、植民地支配責任はもとより、日本国家の近現代史の総否定を突きつける敗北だ。高市のような“極右”から「まずい発言だ」と思っている“穏健派”まで、保守勢力はそれ故に“挙国一致”で発言不撤回を貫くだろう。むしろ、日中対立激化を国家情報局創設、スパイ防止法制定、非核三原則見直し＝核持ち込み規制緩和、軍拡に利用するに違いない。危機管理投資をはじめとした経済安保強化加速にも利用するだろう。それがもたらすのが財政危機、円売り、国債暴落の地獄への道だとしても、当面は積極財政が恩恵をもたらすのではないかという幻想が高市政権の高支持率を支える最悪のシナリオも想定される。議員定数削減はプーチンの選挙制度操作に類する反対政党潰しにつながる。それは明文改憲の環境がますます整ってくることを意味する。だが、政治不信が政治家減らし支持に安直につながり、民主主義を損なう制度変更が歓迎されかない。

対外硬の機運と高市高支持率の下で、私たちはますます苦境に追い込まれることを覚悟せねばならない。権力と財力を背景にした体制側の民衆に対する情報戦・認知戦に対抗し得る発信力も持ち合わせていない。出口なし！だが、パンドラの箱から最後に出てきたのは希望だ。苦境を日本国家の近現代史の総否定を踏まえたまだ見ぬ世界を展望する好機に転化する年に 2026 年をしようではないか。

（文責:池田）

【活動報告】 ※編集責任者の池田は、父が 11 月 8 日に 92 歳で死去したため、11 月 14 日までの取り組みには参加できなかった。代わりというのも変だが、「コラム：父と戦争・戦後」を収録させていただく。

11 月 3 日　まもれ！憲法　いかせ！憲法　武力で平和はつくれない　ねりま集会&パレード

11 月 6 日　開くな！憲法審査会　明文改憲も実質改憲も許すな！　国会行動　やめろ！外国人敵視政策　いらなぞ！スパイ防止法　緊急事態条項追加改憲反対！　許すな！防衛費 GDP 比２％化・軍拡補正予算　成長戦略＝経済安保＝軍需産業育成 NO!　主催：総行動

11 月 14 日　15 年目の福島を考える　佐藤かずよしさん(福島原発刑事訴訟支援団長/いわき市議)をお招きして

・琉球弧の戦場化を許さない！11 月行動　政府交渉&「避難計画」を問うシンポジウム

11 月 15 日　上記 11 月行動　琉球弧の戦場化を許さない！新宿アクション　アピール&デモ

11 月 17 日 練馬アクション学習会 スパイ防止法 後掲<報告>参照

11 月 18 日　練馬人権センター&ヘイトスピーチ許さない・練馬、練馬区人権・男女共同参画課との交渉

11 月 19 日　許すな！辺野古基地建設　受注ゼネコンへの抗議 1 日アクション

11 月 23 日　第 10 回ねりま沖縄映画祭　わたしの沖縄　あなたの沖縄　24 日の「劇場が終わるとき」で終了　沖縄エロス外伝　モトシンカカランヌー　※個人的には、今年はこの上映しか観に行けなかった。残念！

11 月 25 日　「琉球弧を戦場にするな 2025」ＤＶＤの上映とお話会　主催ＮＯ！有事法制・足立の会　池田講演

11 月 29 日

・異議あり！在日米軍司令部強化　赤坂プレスセンター周辺フィールドワーク　呼びかけ：大軍拡ＮＯ！

・みんなでアピール第２回　外国人いじめはいやだ！　差別のない社会がいい！　練馬駅情宣

12 月３日　大軍拡と基地強化にＮＯ！アクション 2025　防衛省交渉

12 月４日　開くな！憲法審査会　明文改憲も実質改憲も許すな！　国会行動　やめろ！外国人敵視政策　いらなぞ！スパイ防止法・国家情報局　緊急事態条項追加改憲反対！　許すな！防衛費 GDP 比２％化・軍拡補正予算　成長戦略＝経済安保＝軍需産業育成 NO!　対中挑発＝「台湾有事＝存立危機事態」発言を撤回しろ！　非核三原則を放棄するな！　主催：総行動

12 月６日　第 34 回　何よりも人と自然を大切にする練馬区をめざす区民集会　平和・基地分科会
差別・排外主義は戦争への道
お話　田中宏さん「戦後 80 年 差別排外主義の現在」　永山茂樹さん「排外主義から戦争国家へ」

12 月８日　練馬アクション学習会　2025 年度補正予算を斬る

・・・

<報告> 練馬アクション学習会 スパイ防止法

■80 年代制定策動時のスパイ防止法案の中身のほとんどは、特定秘密保護法、経済安保法などで既にカバー済。

■戦前・戦中の有事法制に照らしても、軍機保護法、要塞地帯法の対象行為は重要土地等調査規制法でカバーしているなど、既に法制化。国防保安法に相当する法制は未整備。国防保安法から推測すると、対象となる行為が新たに加わるというより、その目的が「外国ニ漏洩スル目的」「外国ニ通報スル目的」「外国ト通謀シ又ハ外国ニ利益ヲ与フル目的」とされていることが新規性。第 16 条２は、「左に揚グル罪ニ関スル事件ニ付キ」と軍機保護法などを列挙している。対外通牒・対敵利益供与の目的による既存の有事法制の対象となっている行為を重罰化するという構成になっている。制定策動されているスパイ防止法も、こうした構成を取るのではないか。

■既存の現在の有事法制では対象とされていない行為で国防保安法にあるのは、第４条での上記の目的での情報探知、収集の犯罪化」他、「第９条　外国ト通謀シ又ハ外国ニ利益ヲ与フル目的ヲ以テ治安ヲ害スベキ事項ヲ流布シタル者ハ無期又ハ一年以上ノ懲役ニ処ス」、「第 10 条　外国ト通謀シ又ハ外国ニ利益ヲ与フル目的ヲ以テ金融界ノ攪乱、重要物資ノ生産又ハ配給ノ阻害其ノ他ノ方法ニ依リ国民経済ノ運行ヲ著シク阻害スル虞アル行為ヲ為シタル者ハ無期又ハ一年以上ノ懲役ニ処ス」。上記第９条の内容が新規に制定されるのではないか。なお、上記第 9 条―偽情報のＳＮＳでの流布、10 条のサイバー版―サイバー攻撃によるシステム障害が対象行為になろう。

■高市首相は、諸外国に倣うとも言っている。ロシアは、2006 年にＮＧＯに外国からの金銭援助の報告を行う義務を課し、2012 年に外国エージェント法を制定。外国から援助を得ている団体は、外国エージェントとして認定する。当初は申告制だったが、2014 年からは申告がなくとも法務省の判断で認定できるようになり、罰金を払いきれずに多くの団体が解散した。さらに、2015 年に国家安全保障上脅威となりうる外国・国際ＮＧＯの活動を制限する法律を制定。ＮＧＯが弾圧対象になる危険アリ。中国の反スパイ法も参照するのではないか。

〔コラム〕父の戦争・戦後　池田五律


津の戦災状況（津市　太田金典氏蔵）

11 月 8 日、父・池田民也が 92 歳で死んだ。父は 1933 年に三重県津市に生まれた。小学一年生から六年生まで少国民教育を受けた学年だ。友人に「満州男（マスオ）さん」がいた。学徒動員と同じ学年であった父の兄は、商業学校卒業後に働いていたが徴兵され、戦後に四川省にてアメーバー赤痢で病死。父の祖父は、津市の空襲で焼死。本人も疎開先の親戚に冷遇された体験も・・・。

だが、父の戦争の思い出は、兵隊さんと津の海岸で相撲を取って、「坊主、強いな！　将来、大将だ！」と言われたといった暢気なもの。それどころか、徴兵拒否者を田んぼの中で追いかけたことも・・・。

旧制中学に入ると、バッジが欲しくて体操部に入部。体育館は空襲で焼失していたので、旧久居連隊の兵舎で練習。予科練帰りの先輩に鍛えられた（宙返りは航空兵に必須）。旧制中学から新制高校に再編された頃から、国民体育大会に出場。食糧難故に大学時代も米持参で参加。宿泊先も、60 年代初頭までは、開催地の名望家宅など。

三重大学教育部を卒業し、県立津女子高の体育教師。器械体操部の監督として国民体育大会・インターハイに連続出場。今なら体罰で問題なるような指導をしていた。1964 年の東京オリンピックの審判も務めた。

大の左翼・労働組合嫌い。といっても勤評闘争に珍しく勝利していた三重は、ほぼ 100％日教組加盟。父も組合員。ちなみに、就職したての父の勤評闘争の思い出は、「池田さん、アイスクリーム買ってきて」。体育教師に何を話しても理解しっこないと思われていたのか、ろくな説明も受けなかったようだ。同期の社会科教員が「船を造る」と退職して長崎に行ったとも言っていた。三菱長船（三菱長崎造船所）か！？

私が子どもの頃は、「ベトナムどうでもいい、賃金上げろ」とか、「俺たちが生きているのは戦後のアメリカの食糧支援のお陰」などと、同僚と家で飲んでおだを上げていた。「反戦とか言って、『動員』とか、軍隊用語じゃないか」と突っ込みも入れていた。「何でも専門家に任せるべきだ。軍部大臣現役武官制がよかった」などとも･･･。槙枝日教組委員長が大嫌い。「あいつは教壇に立ってない！」。

そんな父が、一度だけ労組の扉をノックしようとした。進学校に転勤すると部活ができないと転勤を止めて欲しかったからだ。ところがウロウロしていた父の前に中から出てきた組合幹部の教師が「池田さん、栄転おめでとう」。「ありがとうございます」とオズオズ引き下がってきた。組合費払ってきたのに・・・残念！

イデオロギー的な信念があったわけではない。最後の旧制中学入学生の結束力は強く、市議選では社会党市議、県議選では自民党県議を支援。労戦統一の頃、「アカが二つに分かれているが分からん」と私に説明を求めた程度の認識。まぁ、グループサウンズも長髪・ジーンズも「アカ」。1960 年代半ば以降は、世の中についていけてなかった。県立の進学校は高校生運動で制服が自由化され、「男女不純異性交遊」が横行していると、中高一貫の管理教育の私立に僕を放り込んだのも父だった。だが諦めたのか、大学に入って以降の僕には寛容だった。デモで後輩が僕と間違えられ誤認逮捕された時、実家にも公安が張り付いた。親父は一言「上か下か」。説明しても分かんないだろうと「下」と答えると、「面倒を見てやれよ」。体育会の上下関係のアナロジーで済んでしまった。

スイング・ジャズとシャンソンは「上品」だと思い込んでいた。1950 年代に青年期を過ごした“戦後”の人でもあったわけだ。“戦後的”といえば、科学信仰も・・・。どう見ても根性主義なのに、自分の指導は科学的トレーニングだと自負していた。戦争観も、アメリカの科学に負けたというものだった。一方、「戦争で負けた日本は戦後、中国やアジア諸国のように貧しかったのに豊かになったのは日本人が優秀だからだ」・・・。

定年後、三度、脳梗塞になって変わり出した。教育基本法改悪の頃には、「今の教師でなくてよかった」とも言い出した。最晩年には、戦死した兄との最後の会話などを思い出して、「何にも考えてなかった」と反省し出した。最後まで日記を書き続け、ウクライナ戦争やガザ戦争のニュースを書き写し、「貴重な記録になる」とも言っていた。戦中の記録が抹殺されたことを想起しているようだった。自分も少国民時代の日記を敗戦直後に焼いたそうだ。「負けたのが悔しかったのか、信じていた自分が恥ずかしかったんだろうか・・・」と自問していた。

突然、オリンピックに今なら補欠で行けた順位だったので、行けない代わりに連れて行ってやると米軍軍用機で沖縄に行き、どっかの校庭で演技を披露して帰ってきたと言い出したことがあった。ほんまかいな！？

ところで、僕の名前は「五律」でなく、「五輪」にしたかったそうだ。産まれたのがローマオリンピックの年だったからだ。女の子だったら「ローマ」だったという。キラキラネームの先駆けになっていたかもしれない。

「父と子」エピソードになってしまった。“戦争・戦後”の証言として読んでもらえれば幸いだ。

【集会案内】

■東大に盗まれた遺骨を取り戻すーアイヌ民族・琉球民族ー

日時:12 月 13 日(土)18:30　会場:全水道会館5階　中会議室

講師　松島泰勝さん(龍谷大教授)　さいとう・まのさん(東京大学遺骨返還プロジェクト)

特別報告　上村英明さん(衆議院議員)　主催:琉球人遺骨返還を求める会／関東

連絡先:沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック　TEL:090－3910－4140

■トランプ・高市"日米新時代"とどう向き合うか 12・18 討論会

日時:12 月18日(木)18:30　会場:文京シビックセンター5 階・会議室C

〔問題提起〕トランプのパワーポリティックスとインド・太平洋地域　大西一平(立川自衛隊監視テント村)

自民・維新ー差別・排外主義政権の目論むもの　池田五律(戦争に協力しない！させない！練馬アクション)

主催:トランプ来日・石破＆天皇会談に反対する実行委員会　連絡先:立川自衛隊監視テント村042－525－9036　他

■第11回　ねりま市民大望年会

日時:12 月27日(土)14:30～16:30　会場:ココネリホール

主催:ねりま大望年会支度人会　連絡先:090－7714－3547(國島)

■ヘイトスピーチ許さない・練馬　「成人式」アピール　1 月 12 日

練馬駅北口ペデストリアンデッキ集合 11:00　アピール11:20～12:30　同上集合13:20　アピール13:30～14:30

■練馬区のヘイトスピーチ対応や多文化共生政策等 について考える区議会議員との懇談会

日時:1 月 28 日(水)19:00　会場:ココネリ3階・研修室

戦争に協力しない！させない！練馬アクション旗開き学習会

2026 年・私たちの課題ートランプ国家安全保障戦略を踏まえて

日時:1月 12 日(月・休日)19:00　会場:サポート練馬　連絡先:090－5208－5803(池田)

ロシアのウクライナ侵攻 2022 年2月から4年　続く戦争の中で・・・

ロシアは今どうなっているのかー経済を中心に

日時:2月5日(木)　18:15開場　18:30開始　会場:練馬区役所20階・交流会場
講師:日臺健雄さん(和光大学経済経営学部教授　専門はソ連経済史, 現代ロシア政治経済, 経済思想史)

主催:戦争に協力しない！させない！練馬アクション　連絡先:090－5208－5803(池田)

【自衛隊・防衛省動向(2025年10月 21～11月 20 日)】

10 月 20 日～31 日　自衛隊統合演習　※実質的に日米豪共同演習
10 月 23 日　小泉防相、最初の訪問地として朝霞駐屯地訪問。
10 月 24 日　高市首相、所信表明演説で 2025 年度中に防衛費 GDP 比２％にすること、2026 年中に安保三文書を改訂することを表明。
11 月 1 日　第 12 回拡大ＡＳＥＡＮ国防相会議（ＡＤＭＭプラス）出席のためマレーシア訪問中の小泉防衛大臣、シンガポールのチャン国防大臣と防衛相会談
11 月 4 日　・クマ対策、陸自、秋田派遣　・空自Ｆ３５Ｂ、宮崎・新田原で訓練開始
・陸自、米国西部ワシントン州の米軍演習場でドローン（無人機）を迎撃する初めての実戦的な訓練を開始
11 月 5 日～20 日　陸自と英陸軍の日英共同訓練。北海道での訓練は初。
11 月 7 日　高市首相、台湾有事＝存立危機事態発言
11 月 14 日　海自・豪・加新合同演習

11 月 15 日 日米豪共同離島等統合防災訓練。

陸自オスプレイ、朝霞飛来！

「東京都・新島村合同総合防災訓練」に連携し、地方公共団体・防災関係機関等との連携強化を図る。

※情報キャッチが遅れ、対応できなかった。東京都及び練馬区に対して、事後的ではあるが、抗議の要請等を検討したい。具体化したら告知します。ご協力、よろしくお願いします。



11 月 16 日～26 日　海自、米海軍、日向灘で機雷戦訓練
11 月 17 日　韓国海軍、海自に共同捜索救助訓練への参加を見送ると伝達。検討されていた空自那覇基地での韓国軍機への自衛隊による給油が、対象機の一部が竹島周辺で飛行訓練をしていたことが判明し日本側が受け入れを中止したことによる。
11 月 19 日
・大分市佐賀関の住宅街で発生し 170 棟以上が焼けた火災で、防衛省は自衛隊の災害派遣を決定し、19 日午前、陸上自衛隊の多用途ヘリコプターUH1 による消火活動を開始
・海上自衛隊呉地方隊と株式会社ＮＴＴドコモ中国支社、災害時における円滑な連携および相互協力を可能とすることを目的に、「災害時における通信の確保のための相互協力に関する協定」を締結。
11 月 20 日
・宮崎県・細島港の「特定利用港湾」指定了解。自衛隊・海上保安庁の船舶などが平時から利用可能に。17 日には、名古屋港管理組合が指定を受け入れる方針を国に伝達。政府は 18 日の閣議で、防衛力強化の一環として有事での自衛隊や海上保安庁による利用に備えて整備する「特定利用空港・港湾」に関し、10 月末時点で 34 空港・港湾を実際に自衛隊が使用したとの答弁書を決定。全国最多の８カ所が指定された鹿児島県の特定利用空港・港湾の場合、24 年４月～25 年２月末までの利用回数は、鹿児島空港５回、徳之島空港（天城町）８回、鹿児島港６回、志布志港（志布志市）２回、川内港（薩摩川内市）１回、名瀬港（奄美市）３回だった（西之表港（西之表市）と和泊港（和泊町）の利用はなし）。
・木原官房長官、航空自衛隊が保有する地対空ミサイル「パトリオット」をアメリカに売却し、「すでに引き渡しを完了した」と発表
11 月 21 日　小泉防衛相、ネットメディア「ReHacQ（リハック）」に出演し、自衛隊の階級名変更（例：１尉→大尉）に意欲を示す。憲法に自衛隊明記「必要」も。

11 月 22 日 16 日に起きた赤坂での女性刺殺事件で、朝霞駐屯地勤務の自衛官が逮捕

・小泉防相、宮古島、石垣島訪問。台湾有事などを念頭に、先島諸島の住民らを島外避難させる沖縄県の計画を巡り、国と県、同諸島の５市町村は 18 日夜、宮古島市の宮古空港で、住民を航空機で避難させる手順を実際に確認した。車いす利用者など要配慮者の移動に重点を置き、住民や市職員ら約 300 人が参加した。

【チェックポイント】トランプ政権の国家安全保障戦略　西半球重視・人権軽視・自前防衛＆対中通商政策協力要請・台湾占領阻止・対日防衛費増要求・　解体するのはBRICsかG7か

> **米国家安全保障戦略の概要**
>
> **■アジア太平洋**
>
> **〇「台湾海峡」の現状の一方的な変更を「支持しない」と明記**
>
> **〇中国依存を減らすため、重要鉱物などの供給網を確保。中国の「略奪」には関税で対抗**
>
> **〇日本に言及がある項目**
>
> **・トランプ大統領が日本と韓国に負担拡大を強く求めていることを踏まえ、両国には防衛費を増額し、敵対勢力を抑止し、沖縄－台湾－フィリピンを結んだ第1列島線を防衛するために必要な能力(新たな能力を含む)に重点を置くよう促さなければならない**
>
> **・(南シナ海の航行の自由確保について)米軍、特に海軍の能力に対する一段の投資だけでなく、この問題が放置されれば被害を受けるインドや日本などの国々との強力な協力も不可欠だ**
>
> **・欧州と日本、韓国などは 7 兆ドル(約 1100 兆円)の対外純資産を持ち、多国間開発銀行を含めた国際的な金融機関には総額１兆5000億ドルの資産がある。米政権はその指導的立場を活用し、これらの機関が米国の利益に資するよう改革を実施することに注力**
>
> **・中国経済を家計消費型にバランス修正すべく、欧州と日本、韓国、オーストラリア、カナダ、メキシコなどには、その目的に寄与するような通商政策の導入を促す必要がある**
>
> **・日米豪印の枠組み「クアッド」による協力継続などを通じて、インドと米国の商業関係などを改善し、インド太平洋地域の安全保障に対するインドの貢献を促す**
>
> **■欧州**
>
> **・ウクライナ戦争の早期終結、ロシアとの戦略的安定を目指す**
>
> **・NATO 拡大から欧州自前の防衛へ**
>
> **■米州　・中国や麻薬組織の影響力を排除**
>
> **■中東　・民主化の押しつけから各国との関係重視へ**
>
> **■アフリカ**
>
> **・重要鉱物やエネルギー開発で協力。援助から貿易・投資中心の関係へ**

第２次トランプ政権初の国家安全保障戦略がまとめられた(12 月５日)。その概要が左である(日経新聞 2025・12・６＆Akiko Nishimae「日韓は防衛費増額し、第１列島線の防衛能力に重点を－米安保戦略文書」Bloomberg2025 年 12 月 6 日 6:29)。

日経新聞の見出しが分かりやすい。**「「西半球」重視　国益保護へ中南米安定に関与　トランプ版モンロー主義」**。既に**ベネズエラに対する「対テロ麻薬戦争」が進められている。地上攻撃に何時踏み込んでもおかしくない**。パナマ運河はもとより、西半球に位置するグリーンランドさらにはカナダ領有の野望も捨ててはいまい。

一方、欧州やアフリカを念頭に「この数十年で相対的に重要性が低下した戦域からは撤退する」とした。ロシアとの戦略的安定を重視しており、**ウクライナ切り捨て**だ。**欧州も自前防衛**を迫られる。

インドに秋波を送っているのも注目すべきだ。**ロシア、インドを取り込んで、対中包囲網**を作ろうというわけだ。

中東については、各国間関係の重視。11 月 18 日にサウジアラビアの事実上の支配者ムハンマド・ビン・サルマン皇太子をホワイトハウスに迎え入れたトランプ大統領は、2018 年にサウジアラビア人ジャーナリストのジャマル・カショジ氏が殺害されたことについて、皇太子は「何も知らなかった」のだと、従来の米情報機関の調査結果とは食い違う見解を記者団に示した。**中東での各国間関係重視とは人権軽視**ということを意味する。その先に見据えているのはサウジアラビアとイスラエルの国交樹立。ガザはじめパレスチナ民衆の人権は考慮外。パレスチナは国家でないし、国家として承認する気もない。シリアのジハーディスト政権もＯＫ。無論、イスラエルは基本野放し。ハマスも武装解除にも統治不関与にも応じるわけがない。

負担増を迫られる一方、中国経済のバランス修正へ通商政策での寄与を要求される欧州含む同盟国には不満を募らせている国が少なくない。**フランスのマクロン大統領は、2026 年のG7に習近平中国国家主席を招待する検討に入った**。**BRICsでなくG7が解体しかねない**。東南アジア諸国も米中の対立に巻き込まれたくないというのが、本音だろう。

そうした中で、**「喜んで！」と、台湾占領阻止への能力強化の一翼を担うどころか最前線を担おうとしているのが高市政権**だ。026 年中の安保三文書見直しは、この米国家安全保障戦略を踏まえたものになろう。その動向を注視していかねばならない。　**(文責:池田)**

【読書案内】参政党、高市自民支持者を考える上でも必読の書

山口定著『ナチ・エリート 第三帝国の権力構造』



中公新書、1976 年

前号で「エコノミスト」（9/２３・３０合併号）の「参政党の研究」などを紹介した中で、**参政党支持者は「今の自営業者は１人で配送業やネット通販業、小さな飲食店を営むといったフリーランス的な働き方をする人が多くなった、中小企業従業員や非正規雇用の人、主婦も含め、参政党が政策で焦点を当てた人たちの多くは貧困層というよりはロウアーミドル（中の下の所得階層）に属するといえるだろう」**といった分析を紹介した。この「ロアーミドル層」支持者説は、ナチス支持者についての通説を思い起こさせる。

この通説を詳しく検証した今や古典的と言ってもいい書籍の一つが、今回紹介する山口定著『ナチ・エリート』だ。その一節を紹介する。

> **ホワイト・カラー、官吏、都市旧中間層が、ナチ党員の場合、一般就労者中の比率より高く、その意味で都市の新旧中間層を中心とした運動であったことを示している。・・・初期の旧中間層的要素が 1930 年以降の大躍進のなかでは顕著に減っている・・・逆に 1930 年以降、官吏が急増している・・・／他方、ナチ党員のなかの肉体労働者の比重が、一般就業人口中の割合に比して低い・・・／しかし、他方では、ナチ党員中の比率から見ると、肉体労働者がもっとも多く 32.1%にも達していたことを念頭におくべきである（ただし、その内容は、小企業、零細企業の職人や徒弟、家事使用人、家事従事者、タクシー運転手、定職をもたない労働者など労働者階級下層部分もしくは未組織部分や失業者であるか、逆に特権的大企業の熟練労働者や職長など労働者階級上層部に属する人々だった・・・）。**

彼ら、特に下級指導者＝活動家は何を期待し、何を敵と認識したのか。**期待したのは「≪民族共同体」の再建による国民的≪連帯≫の回復」、「≪国家的、国民的威信」であり、敵は「マルクス主義者一般」、「共産主義者」、「社会主義者・自由労働組合指導者」**と認識されていたと言う。

≪帝国指導部≫には「下層中間階級」出身者は少ない。階統制を下降するにつれ「下層中間階級」が増える。どの階層出身者であれ、「挫折」体験の所有者や「周辺地」出身者など「周辺人」の歪みが彼らを突き動かす要因になったという説がある。前者に関しては、「下層中間階級」から**「上層中間階級」の地位を獲得した「新しい成りあがり者」の再度の転落の危機**が契機になっているという説を基に、≪帝国指導部≫を「成功した親の挫折した子」や「失意の知識人」、「一代の成功者」、「由緒ある家柄の出自で挫折した者」などと分類している。後者に関しては、**工業化と近代化に直接に接近している地域の反都市・反工業の反発と賛美の両義性**が見られると指摘している。

投票者はどうか。**「最大の票源は、それまでの選挙では棄権していた有権者、ならびに新しく選挙権を得た若い有権者」であり、「次いで多いのが旧右翼ならびに中間派の諸政党の支持者から移行した者」**だったと言う。

本書では、こうした階級階層分析と絡めて権力掌握後の内部闘争が跡付けられていく。そして、権力掌握期から爛熟期、侵略戦争を本格化させる 1938 年以降と、年を経るほどに第一次世界大戦当時は幼児もしくは少年だった若い世代が指導者に進出し、大衆運動の「理念」よりも親衛隊指導者に見られるように「官僚的組織的実務への貢献」と、ヒトラーへの個人的忠誠でなく「「エリート中のエリート」の集団である誇り」が特徴になっていくといったように、経年変化を追跡していく。

参政党・高市支持者の分析をするに当たり、こうした本書の階級階層分析は鏡となるのではないだろうか。

なお、本書には**（軍需）産業界の反発―融合―共棲過程**の分析など、今日を考えるに必要な指摘が多々記述されている。**「直接的軍事力の異常なスピードでの膨張と、それをカバーする軍需経済の絶えざる立ち遅れという基本的な「跛行性」は・・・≪電撃戦」戦略の選択を余儀なくさせるという意味で、戦略構想をも規定することになる」といった指摘も、高市軍拡に警鐘を鳴らす**ものとして読むに値する。是非、ご一読されたい。

（文責：池田）

※偶然だが、比較的最近（1年以内）に出版された本と、出版からかなり年数は経っているが、現在情況に照らして「今、読む価値アリ」と思われる本と、隔月で紹介してきた。今回は、後者になる。今後も、できるだけこの隔月体制を継続していくつもりである。

【雑誌漁り読み】週刊「東洋経済」2025年11月8日号 防衛予算増額の大号令、株式市場沸騰の行方

第５号の本欄で『日経ビジネス』（2025年８月号）「特集 経済安保、企業が主役」を紹介したのに続き、経済雑誌の防衛産業特集の紹介だ。このこと自体が、産業界、そしてサラリーマン、そして投資家（30代から50代の少額個人投資家を含む）が、いかに防衛産業に熱い視線を送っているかを物語っている。「死の商人」というマイナス・イメージが何時の間にか払拭されてしまったことに、改めて驚愕せざるを得ない。

タイトルだけで中身の分かる記事も多いので概括すると・・・。

防衛費増大と輸出の道が開かれたことで、2022年度に5000億円弱だった防衛事業売上高が2026年度までに１兆円規模に膨らむと見込まれる三菱重工など重工３社（三菱重工、川崎重工、ＩＨＩ）や、レーダー、迎撃ミサイル、指揮統系統システムなどを幅広く防衛省に納め、2030年度の防衛事業売上高が6000億円に達すると予想される三菱電機、潜水艦探知に用いるソナーシステム、ソノブイ、戦闘機のコックピットディスプレイを手がけるＯＫＩ、レーダーや電波探知装置を生産し三菱重工・三菱電機の下請けも引き受ける東芝など総合電機メーカーが、**防衛関連事業の売上・利益率共に上昇し、株価も上がって、増産体制に入り、防衛シフトの組織再編**も進めている。ＡＩを用いた偽情報を見破るなどの**情報戦・認知戦の分野などではベンチャーの参入も顕著**で、航空機のセンサーなどを取り扱ってきた老舗の東京計器とドローン探知の独自技術を持つメトロウェザーの提携などが起きている。ミサイルなどに欠かせない汎用品を生産しているソニーや、防弾素材になる繊維を供給している帝人、銃の照準器メーカーにスコープを開発しているディオン光学技研といった**一般的には防衛産業と思われていない企業も防衛関連企業化**しつつあり、それは刃物メーカーなどにも見られる。こうした防衛製品市場の拡大に伴い、防衛コンサル市場も拡大している。まさに「軍と民　縮んできた距離」というわけだ。

だが、懸念材料も少なくない。自衛隊高級幹部は、「急速拡大を支える人材が質量ともに足りていない」と言う。日本の防衛関連企業は国際市場での経験値があまりにも乏しい。輸出に伴う仕様変更によるコストなど、未知のリスクもある。そこでオーストラリアへのフリゲート艦売り込みの際に作られた「官民合同推進員会」（官側では内閣官房、外務省、財務省、経済産業省、民間側では三菱電機、ＮＥＣ、日立製作所、ジャパン・マリンユナイテッドなどが参加）といった仕組みが成功例として持ち上げられる。元防衛装備庁長官は、豪軍向け艦艇の次には航空機、電子部品が有力だと言い、日本版の対外援助有償軍事援助のようなものが必要だと語る。政官界からは業界再編・統合論も根強い。だが、それは冷戦後の市場縮小局面での生き残り策だった欧米のケースをモデルにしたものであるし、事実上、**三菱重工一強**となっており、再編・統合は一定実現している。そう指摘する小木洋人は、契約額２位以下の企業の競争力向上のために、防空ミサイルなど海外需要の大きな製品を持つ企業の海外展開や、弾薬など国内需要の低調な事業の集約を促す必要があると言う。また、再編を方向づけにくい通信・システム分野については、企業同士で防衛向け製品の仕様などを統一するように促し、将来的な統合の余地を残すべきだと主張する。

人材や生産基盤を質量ともに維持・向上し続けるには、海外市場拡大および売り込んだ製品のメンテや入れ替えだけでなく、需要の創出が必要だ。その最たるものは、戦争に外ならない。経済の軍事化は戦争への道だということを言い続けなければならない。　（文責：池田）

※「「雑誌漁り読み」でなくて「読み漁り」ではないの？」との質問を受けた。「読み漁り」の方が「正しい日本語」かもしれない。だが、「雑誌を漁って読んでいみたら、こんなだった」という意味で、タイトルは「漁り読み」のままにしたい。

【読書会より】「闘う 1980 年代」を読む

第 5 号の【自著紹介】のコーナーで紹介した大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究6　闘う 1980 年代』新曜社、2025 年 7 月刊　2600 円+税）の読書会を、編者の松井さんも交えて行った（10 月 30 日in藍苑）。参加者から感想を書いてもらった。1980　年代に“闘って”いた人もいなかった人も、生まれていなかった人も、1980 年代の運動体験の経験化に活かしてもらえれば幸いである。なお感想は年齢順に収録した。

闘いはあったけど・・・新人類の大多数は闘いを忌避した

池田五律



1980 年代は、前半は反トマホーク（反トマ）、後半は反天皇制（ヒロヒトXデー反対闘争）と指紋押捺拒否闘争。この 1980 年代の見取り図は、20 歳代の私自身の運動体験からしても納得できるものだ。

「日本はこれでいいのか市民連合」結成が 1980 年。それ以降、６・15 には反安保集会（６月共同行動）。82 年には国連軍縮総会に向けた大きな集会。79 年の朴正熙射殺から全斗煥による軍事クーデター、光州決起、金大中救援・・・といった日韓連帯運動。それらに違和感ばかり抱いていて一度運動を離れていた私は、学内での原理研・統一協会との攻防と並行して反トマ、レーガン来日反対、全斗煥来日反対と、学外での取り組みにも出るようになり大学間共闘も作っていった（首都圏学生実）。その全斗煥来日に際した天皇会談反対の過程で、天皇制問題と出会う。沖縄についても、87 年の天皇訪沖反対闘争（ヒロヒトは下血で訪沖せず）が“沖縄との初の出会い”といっても過言ではない。指紋押捺反対の運動支援に取り組んでいった後輩たちも、全斗煥来日・天皇会談反対闘争の総括過程から登場してきたように記憶している。だが、80 年代の闘いという場合、「日韓・狭山・三里塚」を中心とした 70 年代後半の闘いとの断絶や 80 年代の初頭の動きも踏まえて欲しいと思う。

網羅的になると全体像がぼやけるかもしれないが、チェルノブイリ原発事故を受けた反原発運動の高揚、スパイ防止法反対なども 80 年代の目立った闘いだった。先に触れた日韓だけでなく、フィリッピン連帯、パレスチナ連帯、アパルトヘイト反対、ラテン・アメリカ連帯と、国際連帯の取り組みも多種多様に存在した。進出企業問題、ＯＤＡ問題、買春観光なども問題化されたし、それら当時の現在的問題と重ねて戦争・戦後の加害責任も踏まえることが徐々に運動圏で共有されるようになっていったこともこの時代の遺産ではなろうか。

本誌にもいくつか女性の運動が取り上げられているが、女性解放運動でなくフェミニズム運動という呼称が一般化していったのは 80 年代半ば以降ではあるまいか。1980 年代初頭に当時の僕の知人が関わっていたものとしては「女たちの就職手帳」（1980 年）、優生保護法改悪阻止実行委員会（阻止連）（1982 年）などがあった。加納美紀代さんたちの銃後史ノートには本当に勉強させてもらった。本誌には消費者運動についての論考も収められているが、生協運動の担い手の中心は女性たちだった。中曽根軍拡反対も・・・。

それらも含め、編者たちには全体像をさらに豊富化させてもらいたい。

反天皇制の運動とも深いかかわりがあったところでは、寄せ場の闘いも忘れてはならない。「山谷　やられたらやりかえせ」（1985 年）には、その当時の状況がよく描かれている。一方、労働運動主流はというと、本誌には「地域主軸への移行」と跡付けた論考が収録されているが、労戦統一・総評解散が「反対」を言う者たちも含め所与の前提として日程に上る中での運動だったことも踏まえて欲しいところだ。「労戦統一」に乗るか乗らないかの踏み絵を回避するがための口実としての「地域」を使う向きもあった。政治的課題に関しても、総評解散は大きな影響を及ぼした。金大中救援とか、総評が大きな役割を果たしていた。だが 1987 年の嘉手納基地包囲闘争とかは「総評の消化試合」の一つとも言われた。頂点的な闘争を線でつなぐのでは見えなくなる断絶。それを踏まえねば運動体験を経験化することにはならないだろう。

反天皇制運動が「幅を狭くする」と嫌われていたことも忘れないで欲しい。「反原発やスピ防止法は広がるから反天皇を持ち出さないで」と言われたことはしばしば。個別課題はタコ壺化し、深化を通して通底するのは困難で、今もそれはアポリア。限界を批判しつつ「戦後民主主義」の遺産を活かす途も険しい。天野恵一さん以外への聞き取りもお願いする。それに何んと言っても 80 年代の闘いは概ね団塊の世代の闘いだった。68 年は“若者の叛乱”だったかもしれないが、80 年代の“新人類”の大多数は闘いを忌避した。リンチ、内ゲバ、爆弾の後で、それは当然だったと思う。70 年代前半のそれらの結果責任を踏まえなければ、同じことが繰り返されかねない。編者たちには、闘いの負の遺産と向き合う視座での社会運動研究を期待したい。

大野光明・小杉亮子・松井隆志編「社会運動史研究6　闘う1980年代」学習会感想

藤田親継

お題は学習会の感想文ですが、上記の本に収められた「インタビュー 天野恵一さん　1980 年代の運動空間―反天皇制運動を軸にした政治的社会運動の〈経験〉から（聞き手：松井隆志）」「インタビュー 朴容福さん　反外国人登録のための「共闘の技法」―指紋押捺拒否予定者会議による集団的抵抗の軌跡（聞き手：金由地）」の二つのインタビューへの感想となってしまうことをお許しください。

■「1980年代の運動空間―反天皇制運動を軸にした政治的社会運動の<経験>から」について



1982 年に大学に入学した当時、「内ゲバ」は決して遠い過去、遠い場所の話ではなく結構身近で、だからこそいわゆる「運動」への忌避感はいわゆる一般学生よりも強かったと思います。にもかかわらず、学内での原理研の台頭などいろいろあって「運動」に携わることになってしまった自分にとっての原則は、これまでの歴史において無効である（場合によっては有害である）ことが判明している「運動」はしない、やるからには首の皮一枚でも可能性がある「運動」をやる、ということでした。一方で、これまでの歴史の中で敗北し、沈滞し、結果として無効・有害のレッテルを張られた「運動」だからといって全否定することはしない、そこに孕まれていた可能性は評価し受け継ぐ、ということも意識していました。

そんな中、早稲田、神田界隈の古書店をめぐり、戦後の運動史、思想史の類の本を読み散らす中で、共感・首肯できる「評論家」の一人が天野恵一さんでした。『批評精神』『軌跡』『「無党派」という党派性』等は、ほぼバイブルもしくは導きの糸でした。

そうした「評論家」としての天野さんへの信頼があったからこそ、天野さんが携わっている運動に関わっていくことも「良し」としたのだと思います。

私を含む当時の運動仲間が持つ上の世代に対する警戒心は、正常な自己防衛本能によるもので、生き延びるためには必要な心構えでしたが、「運動」を志向しながらも世代や学生という属性を越えた交わりを持たない、というのも実は不健全なのだと思います。

当時、上の世代で「古書店主」であった天野さんから話を聞くことができたのは、自分たちの立ち位置を理解する上で、とても貴重なことだったとつくづく思います。

この「1980 年代の運動空間･･･」は、なぜ天野さんと出会うことができたのか、それがとても幸運なことであったことを明瞭に理解させてくれるものでした。

■「反外国人登録のための「共闘の技法」―指紋押捺拒否予定者会議による集団的抵抗の軌跡」について



学生時代後半に、真剣かつ心から面白いと感じながら関われたのは指紋押捺拒否者への支援活動でした。もちろん指紋押捺制度と外国人登録証常時携帯義務の撤廃は人道的に真っ当な要求であるだけでなく、植民地支配をひきずった差別を正すという意味も有しており、「運動」に携わる者にとっては避けては通れない課題だったと思います。

ただそれだけではない、朴容福さんに体現される「やることの意味を問うことよりいかに戦うか」にこだわり「相手をやっつけるのではなく変えること」という運動論が、有効であったし人々を惹きつけたのだと思います。

「反外国人登録のための･･･」は、当時は肌感覚で感じていた「指紋押捺拒否」の運動の有効性、魅力を見事に言語化してくれました。そしてその有効性、魅力は時代を超え得る、と思います。

最後に、インタビュー末尾の「しかしこの日本人の市民運動ってのは、なんでこうもダメなんだろう。朴容福がいないからか？」の 40 年越しの挑発はしっかり受け止めたいと決意表明して駄文を閉じます。

『闘う1980年代』読書会・感想

小野信也

私は学習会当日遅れての参加でしたので、会そのものの感想というより、私の 1980 年代における実践を振り返ってみました。1987 年に大学に入学して、1990 年代初頭まで大学での運動に参加していたのですが、先行する世代の方達の実践を引き継ぎつつ、アレンジしていったように思います。



もっともその引き継ぎ方法は、私が在籍していた早稲田大学という（某党派がとても強力な）環境に大きく左右されていたと思います。ストレートにスローガンを発せられない状況があり、裏と表を使分けながら、徐々に学生の皆さんのなかに入ってゆく方法を取っていました。もちろん他の大学でも似たような状況はあったでしょうが､やはりひとりの学生が某党派に虐殺されたことによって一旦はひっくり返った学内政治状況が、その後組織的暴力によって、再び圧政・暴力的排除を許すようになってしまった記憶は（私たち世代のものではないにせよ）多大な影響を与えていました。しかもその政治党派を無視することもかなわず、ある程度付き合わざるを得なかったには大変息苦しいことでした。

そのようななか、私は｢脱政治」というより「脱戦争」＝「戦争放棄」をひとつの戦略にしていたように思います。まともにぶつからない。たとえ自分が「正義」と思うことでも表面上は曲げて、相手をつぶす＝否定することはしない…そしてノラリクラリと振る舞いながら､個別の運動課題を育てて残してゆく努力をすることである。

当時も被差別部落や在日韓国・朝鮮人などへの差別は過酷に再生産されていましたし、これらを許さない闘争を構築してゆくことを、毎年学費が値上げされ、学生が階層化されつつあった大学のなかにおいて（学生意識のなかに差別意識が再生産される状況において)、実践してゆくことを優先にした場合、某党派とはまともにぶつかっている暇はなかったのが本音です。それはまさにミクロな意味で政治的な行動ではありますが、党派的対立を回避すると言う意味においては、｢脱政治」的な様相も呈していたと思います。

世のなかがバブル景気のなかで、反差別闘争の関わるというのは、確かにメジャーなことではありませんでした。しかし確かに仲間はいましたし、呼びかけるタイミング・方法によっては、党派を超える人数の学生大衆と繋がることもできました。そして心の内に「普遍」への道も秘めつつ、個別課題を解決するために実践を積み重ねるなかで生まれたネットワークは、いま現在にいたるまで続いていると思います。｢普遍」と「個別」が絡み合いながら、決して中心がひとつではないネットワークが…この先はこれからの課題です。

※編集部：暴力の問題は反戦の論理にも深く関わっています。｢正義の戦争」を肯定しないのが編集部の立場です。｢闘う 1980 年代」には、反差別闘争の 1980 年代が触れられていないけれど、反天皇と反差別をつなぐ試みがあったことは触れておきたい。アクションとしては、反差別の視点を反戦の取り組みにいかに反映させるか、考えていきたい。

『闘う 1980 年代』読書会@藍苑の感想文

佐藤えり

読書会の時に、松井さんが「1980 年代はまだ歴史学で扱われない」というお話をされていたので、「いつまでが＜歴史＞扱いになっているの？」と訊いてみたところ、「68 年頃までかな」とのことでした。なるほど、道理で…『80 年代』と題していても＜歴史上の人々＞の話が多かったから、82 年生まれの私にはよくわからない難しい本だったんですね。でも、松井さんがインタビューをしていたページには、＜藍苑にいらしてくれたことのある方のお名前＞や＜藍苑で話題になる方のお名前＞がたくさん出てきたので、なんだか親近感が湧きました♪

読書会の日は、＜八丁味噌おでん＞や＜長芋のワサビ漬け＞＜柿のコンポートのクリームチーズ和え＞などを作ったけど、「美味しかったから、もうほとんどなくなっちゃったよ！八木さんの分まだあるの？」「本当、メッチャ美味しい！」と食べてくれる藤田ヤッチー（兄貴）や松井ニイニイ（お兄ちゃん）の笑顔を見られたから嬉しかったやさぁ。一人で仕込みに手間かけた料理で、誰かの笑顔を見られた時、じゅんに幸せを感じるやさぁ。（←「宝島語」だとこんな感じかな？このコーナーの記事は藤田さんがしっかり書いてくださったようなので、このあたりで切り上げて、次は小説『宝島』のコーナーへ…。）

【文化欄 小説編①】感想文集 小説「宝島」をどう読んだ？

前号で映画「宝島」の四人の感想を掲載した。その方々だけでなく、映画を観た人の多くが小説との違いが気になったようだ。前号を読んだ方から、「「宝島」はジェンダー的に見ると、原作より映画のほうがよくできています。その点でも映画はかなりの傑作だと思います」といった感想も寄せられた。そこで、今回は、小説の方の感想を寄せてもらった。（編集部）

語り部は誰！？ 叙事詩としても読めるかも･･･

池田五律

伝説の“戦果アギヤー”の英雄オン。嘉手納基地の中に残されたウタキに産み落とされると同時に母を失ったウタ。ウタは襲撃に失敗して米兵に追われて同じウタキに彷徨い込んだオンに救われた。母と米軍幹部の間に生まれたウタこそ、“戦果”だった。密貿易団“クブラ”に襲撃失敗の落とし前だとして拉致され舌を切られたたオンに伴われてウタは悪石島へ。密貿易団が米軍により壊滅される混乱の中、悪石島から逃げ出したオンはウタを伴い沖縄島へ流れ着き、ガマで暮らし、身体を衰弱させていき、死ぬ。ウタはコザで孤児として生き抜く。オンの行方を追う親友のグスク、弟のレイ、恋人のヤマコと出会い、オナリ神とでも言うべきキヨと保護施設で出会う。キヨは母に引き取られた後、母娘での売春を余儀なくされ、母による無理心中で死んでしまう。ウタは、オンを騙ってオンが生きているかのように思わせる手紙を諸所に送りつける。そしてコザ暴動の夜。基地内に飛び込んだレイたちの後を追い、米兵によって射殺される。ウタがオンを騙らずに書いた残された手紙には、沖縄島での体験すべてに、「その豊かさに、たくさんの宝物に、じっとしていられずに雀踊りするようなあうれんばかりの驚喜が叫ばれていた（あきさみよう！の連発）。ウタもオンはじめ先に逝ったすべての人と共に地霊となって語り部になる。



「ウタたちは美しく大切な、永遠に消えない秘密となって、／雄渾の海に抱かれた、島の叙事詩を語りつづける。／青い水平線の向こうに、いつかはだれもが行くだろう。／あとから来るすべての親兄弟とともに、後世の戦果アギヤ―とともに、／だけどそれまでも土地の鼓動は打ちつづけなくちゃならないさ。だからまた始めよう、そろそろほんとうに生きるときがきたー」。

ウタを主人公にした粗筋を書くとすれば、こんなところか。こうまとめてみると、オンもウタも地霊の人格化であり、叙事詩の語り部＝主人公は“宝島・沖縄”の地霊とも読めなくない。

叙事詩と言えば、ホメロスの昔から神と英雄。レイは「虐げられた人たちを解放できる英雄」を兄オンにその理想を見、その後を追いかける。グスクは「いったん転がり始めたら止められない・・・貧乏とか病気とか、暴動とか戦争とか・・・だれにも止められないものに、待ったをかけるのが英雄よ」と応える。ヤマコは「ニイニイたちじゃ頼りない、あたしが島の英雄になるよ」と教員として子どもたちのためにもと復帰運動の活動家になっていく。レイは警官となり米軍の諜報部とも関係を持つようになったグスクを「アメリカの飼い犬」と侮蔑し、ヤマコには「それにしても本土復帰がそんなにいいかねぇ」、「おれは最近、思うんだよな。ほんとうに目の仇にしなくちゃならんのはアメリカーよりも日本人じゃないかって」と突っ込む。その三人がコザ暴動の夜に交差する。実在の瀬長亀次郎だけでなく、脇役の三人を見守り続ける国吉さん、キャラウェイ高等弁務官暗殺を試みたタイラや又吉、古株の女給で美里の組合長代理を務めるに至り巫女のような風格を漂わせるようになったチバナ・・・。登場人物の誰も彼も、どこか神話めいている。米軍諜報部のアーヴィン、それとつるんでいる二人のダニー岸、“クブラ”の謝花ジョー・・・。彼らは悪神・悪霊の化身というところか。

だが、三人とも英雄にはなれなかった。最も分かりやすいのは、塀の中の暴動から街頭のコザ暴動の夜へと至るレイの軌跡だ。レイを主人公と見立てると、英雄になれなかった物語になる。「復帰」が既定のものとなり、全軍労ストが行われた69年。ヤマコは大きな壁にぶち当たる。グスクは、暴走を止めるのには超人的な働きを見せるが、妻から離婚を要求されることを怯える小心者。いや英雄に救いを求めても救われないというのが、作者のメッセージなのかもしれない。

まぁいろんな読みができて、よくできた小説です。映画は映画。小説は小説。小説もご一読を。

<映画『宝島』を観た後で小説『宝島』を読んだ感想文>と <小説『宝島』を読んで改めて映画『宝島』について思ったこと>

佐藤えり

小説『宝島』は映画『宝島』ほど「タバコを吸いたい衝動」には駆られませんでした。藍苑で誰もいない暇な時に小説を読んでいて、吸いたい時にタバコを吸っていたから、ポップコーンも別に必要なかったのですが。でも、一時期<飯テロ>という言葉があったけれど（今も使う言葉なのかな？）、改めてアレは<タバコテロ>の映画だと思いました。映画制作スタッフの中に愛煙家の方がいたのでしょうか？映画『宝島』の<タバコテロ>に苦しめられた私の戦友は池田編集長だけなのかな？喫煙者のみなさん、どうですか？（タバコを吸いたいのに吸える場所がないという事態が頻発するようになったのは健康増進法施行以降で、吸える場所が更に壊滅状態になったのがコロナ禍というのが個人的な感覚ですが…喫煙仲間のみんなは体を張って防衛費に貢献して国を守っているのにね！とか言っているとタバコ論に話がズレていきますね。）

小説ではレイくんが「幸運の少年（カフーボーイ）」と強調されていたのに対して（オンちゃんの首飾りも、カフーボーイのレイくんとの思い出の品だったとは…）、映画では特にその描写がなかった気がしますが、レイくんは窪田正孝くんのイメージのまま変わりませんでした。ですが、小説を読んでいると、他の登場人物は「グスク：桐谷健太（というより浦ちゃん？）／ヤマコ：杏ちゃん／オンちゃん：斎藤工」というイメージに私の中では変わっていきました。

グスクについて、池田編集長は「小説の方がますます影が薄くて『主人公感』がない」とブツブツ言っていましたが、アーヴィンに楯突いて警察をクビになったり、映画よりも『不甲斐ない主人公』というキャラが立っているような印象を私は受けました。「予定外の戦果」＝ウタくんとの絡みも映画よりはあって、「冗談でまぜっかえして。そういうところはニイニイにそっくり！」とヤマコから言われたウタくんも「おいらは、あんたたちに育てられたんだから」と返していたり、小説ではグスクもウタくんを育てることに貢献しているという違いもありました。

映画ではレイくんとチバナの絡みはあまりなかった気がするけど、小説ではヤマコが<表のヒロイン>なのに対してチバナが<裏のヒロイン>という感じで、チバナの存在が目立ちます。

ただ、チバナの話以上に、池田編集長と盛り上がったのは「ウタくんの妹分のキヨちゃんって子、映画の方に登場していたっけ…？！」という話で…。小説では、ウタくんにとってキヨちゃんの存在が大きいんですよね。ラストも、キヨちゃんを失ったことが大きく影響して、ウタくんは「戦果アギヤー」としての死を選んだように読めます。映画の「レイくんを庇って」という死に方より、納得感のある死に方のような気がしました。

それから、小説では宜野座の洞窟（ガマ）が重要な場所として登場します。オンちゃんがウタくんを連れて、悪石島から辿り着いたのが宜野座の洞窟（ガマ）で、死んでから17年経ってもオンちゃんの骨が残っていたことに関しては、映画の海っぺりより説得力がありますね。土地勘がない私にとっては、小説だと中断して、地図を調べられるという利点もありました。地図を眺めて「ちょっとウタくん！宜野座ってコザからメチャクチャ遠いじゃない？」とか思ったり…。

あとは映画より小説の方が、リアルなのだろうけれど描写が残虐ですね。米軍機墜落事件も小説の方がその凄惨さが伝わりますが、映画を観ている時にはまったく思いもよらず、衝撃的だったのは「オンちゃんが舌を詰められてまで守った戦果」＝ウタくんだったということ…。映画でも、確かにオンちゃんがウタくんに何か言葉を語りかけるシーンはなかった気がするけれど、ウタくんが初めてヤマコと出会うシーンも…泣いているヤマコに対して、ウタくんが花を渡してみたり、変顔してみせたり、何も言葉を発しないまま一生懸命笑わせようとしていたのは、オンちゃんから<言葉に依らない愛>を教わったウタくんが、ヤマコに対して<言葉に依らない愛>を伝えようと頑張っている描写だったの？と思い返したりしました。

『宝島』絡みで「暴動だ！」「決起だ！」「蜂起だ！」とみんなで話していると、サイレン鳴らして拡声器で何事か叫んでいるパトカーが藍苑の入り口を塞ぐように停まり、「なんか誤情報で通報されて、私たちは共謀罪で捕まるの？」となる<アジト藍苑包囲事件（？）>が起きたり…色々ありますが、2019年にふと思い立って藍苑をオープンしていなかったら出会うこともなかったのに、いつのまにか「将来はグループホーム作って、それぞれ得意なことや好きなことをやって、お互い協力し合いながら一緒に暮らそうよ」なんて話までしながら、



色々なことを語り合えるみんなが私にとっては「予定外の戦果」なのかもしれないですね。（池ちゃんから借りた『宝島』を読み終えたところで、『宝島』の続編『英雄の輪』を貸してくれた嘉藤ちゃん、ありがと―♡私の感想も書き留めておいたから、また嘉藤ちゃんの話も聞かせてね。）

それに…「なんで第１号も第２号も<池田の独り言>なの？」「じゃあ、なんか書いてくれる？」「いいよー（…アクションとは特に何の関係もない私が落書きしてもいいの？）」と、アクションニュースの原稿書きを始めたわけですが、お会いしたこともない方々から感想を寄せていただけるようになっていくとは思ってもいなかったので、読者のみなさんも私にとっての「予定外の戦果」ですね！

つまるところ……私にとっては周囲のみんなが幸運（カフー）だから、今回も読んでくださって、ありがとうございます♪（←「つまるところ……」は読者のW部さんが私にご紹介くださったザビーネ・ホッセンフェルダー著『数学に魅せられて、科学を見失う　―物理学と「美しさ」の罠―』（みすず書房）のマネです。W部さん、この本面白かったですよー！ということで、次は科学哲学のコーナーへ…。）

〔コラム「モトシンカカラヌー」を観て〕



「第 10 回ねりま沖縄映画祭　わたしの沖縄　あなたの沖縄」で「沖縄エロス外伝　モトシンカカランヌー」を観た。「モトシンカカラヌー」とは「元手がいらない」という意味。売春を指す。米軍基地があるゴザの「モトシンカカランヌー」をしている女性たちを基軸にすえて 1969 **年**半の沖縄を取材したドキュメンタリーだ。完成は 1971 年。『宝島』のクライマックスの場面と重なる時期を撮影したものだ。

まず「モトシンカカラヌー」という言葉が差別的。元手がかからないどころか、心身を投じて仕送りや借金返済をしている。マイナス状況から売春を余儀なくされたのだ。さらに暴力的支配の下で搾取される。生きる力を奪われ『宝島』のキヨちゃんの母のように自死する人もいる。だが、チバナのようにしたたかに生き抜く人もいる。ただ単に可哀そうな救済対象扱いをするのでは、これまた人格を否定してしまう。彼女たちを暴力的に支配するヤクザにしても、悪質な客から彼女たちを「守っている」面もあり、その多くは苦難の末にようやくシノギにありつけたといった悲哀の人生を背負っている。小学生の頃、父ちゃんヤクザ、姉ちゃんソープ嬢、兄ちゃんチンピラといった同級生たちと身近に接していたので、彼・彼女たちイコール悪とみなすことは僕にはできない。そこら辺の機微も、このドキュメンタリーはよく捉えている。

全軍労のストと彼女たちを対比させるシーンも、単に対立的にとらえることができない米日支配への鬱屈した憤怒が両者に共に蓄積されていること－コザ暴動で噴出したマグマのマグマ溜まり－が伝わってくる（今の時点でいろんな知識を持って観ているからかもしれないが・・・）。

戦後左翼のどうしようもなさも、見事に抉り出している。支援に来た総評のオヤジが、正直に買春したと言い、「地元の大阪ではビジネス的だが、沖縄の彼女たちとは心が通った」なんて言い、「奥さんに言いますか」と問われ、「それは言えません」なんて答えるシーンは、もう苦笑するしかない（それで済むことではないが・・・）。同じグループの女性労働者がいかにも専業主婦予備軍の目線で彼女たちを見ていることも浮き彫りにしている。

ブラック・パンサーのお兄ちゃんたちはカッコいい。でも彼らも彼女たちを理解していない。いや理解しようとする回路を持っていないのではないか。格好良さが併せ持つマチズモ。差別される者が差別する重層的で複雑な差別構造・・・。それもこの作品は映し出している。嗚呼、68 年のメキシコ五輪。国歌・国旗に対して拳を突き上げて差別に抗議した黒人陸上選手の姿を、当時の小学生たちはカッコいいと真似たものなのだが・・・。

映像や音声が今や途切れてしまうところも少なくないが、それがまた味にもなっている。是非、一度、鑑賞して欲しい作品だ。

池田五律

【科学哲学への招待⑥】

12 月 6 日に行われた「第 34 回　何よりも人と自然を大切にする練馬区をめざす区民集会　平和・基地分科会　差別・排外主義は戦争への道」で、参加者から講師に「「日本国民ファースト」ならまだしも理解できるが、「日本人ファースト」と言う場合の「日本人」とは？　「日本国民」と「日本人」の違いは？　定義はあるのか？」といった質問が出た。この間、同様の質問を他の集会でも何度か耳にした。「日本国民」の定義は「日本国籍を有する者」と法的にも明確に定義できる。では「日本人」は？というと明確な定義がない。「「日本民族」に属するというアイデンティティを有する者」というだけでなく、血統主義的なニュアンスが漂う。血統主義は人種主義、優生思想と結びつく。それを正当化してきたのが似非科学の優生学だ。遺伝子のゲノム解析を通して「「日本人の起源」を探る」といった形質人類学者は、その現代版とも言える。琉球人遺骨返還を阻んできた連中だ。そうした分野も「生物学」に分類される。そもそもその「生物学」とはいかなるものなのか・・・。これまでこのコーナーでは、科学哲学の名著紹介の形で連載してもらってきたが、今回は「自然科学」と分類されている分野そのものを対象に論考を執筆してもらった。**「生物学」を対象とした本稿を「日本人ファースト」なるものを批判的に検証するためにも一読していただきたい。　（編集部）**

生物学は「自然科学」なのでしょうか？

佐藤えり

今回は本の紹介ではなく、このテーマで書くことを池田編集長に依頼されたので。（それって「いつも以上に好き勝手自由に書いていいよ」ってことだよね♪）

一口に「科学」“science”と言っても、「社会科学」“social science”、「自然科学」“natural science”、「形式科学」“formal science”、「応用科学」“applied science”・・・と色々ありますね。
「人文科学」は“humanities”なので、「科学」“science”の枠組みからは外しておきます。文学部哲学専攻出身の私よりも「文学好き」の池ちゃんは、「形式科学」に分類される数学の本を私が読んでいたりすると、「僕は君と違って『情緒』がある人間なんだよ！」と言って文学書を見せてくるけれど…。1931 年当時、数学界の大御所として活躍していたヒルベルト爺さんが人生集大成の仕事をしていたら、25 歳のゲーデルに『不完全性定理』で「それ、無理っすよ」と徹底的に打ちのめされて、その現実を受け入れざるを得なかったときの計り知れない切なさ…とか、数学の世界にも「情緒」があるの！と私は思う。
・・・と言っていると「『情緒』って何でしょうね？」と脱線していきそうなので話を戻しますが、「生物学は『自然科学』なのでしょうか？」というのが今回のテーマです。

いつだったか峰お姉ちゃんと二人、『八木や』さんで飲みながら、「知らないことは『知らない』って言いなさいよ！って思うよね」「そうそう、自分が知らないだけのくせに『それとこれは関係ありません』とか平気でウソをつくよね」・・・というＡＩに対する悪口で盛り上がりました。そのＡＩによれば「（自然科学と社会科学の）主な違いは、研究対象が自然現象であるか人間社会であること、そして『人間の意図的行動』の有無が研究対象の振る舞いに影響を与えるかどうかにあります」とのことですが…。
「自然現象」って何でしょうね・・・？　たとえば、ゲリラ雷雨やその結果としての災害だったり、クマが頻繁に人家を訪ねてくるようになっていることだったりは「自然現象」？　でも、夏にゲリラ雷雨が増えていることの原因やクマが山の中だけで生活ができなくなっている原因って、「人間社会」が環境を変化させていることも一因としてあることは否定できないですよね？　経済的効率性を追求する「人間の意図的行動」が全く影響を与えていないとは言えないですよね？高校の生物では「生物の環境応答」「生態と環境」といった分野を教えているようだけれど（というか、私も学んだのかもしれないけど、高校の生物で何を学んだのかは忘れてしまいました…）、「生物が外部の環境変化にどのように対応するか」とか「生態系と環境がどう変化していくか」とか、どう考えても「人間社会」や「人間の意図的行動」が影響を与えていますよね？
そうか！「人間社会」や「人間の意図的行動」なんてものが幻影に過ぎないと考えれば、すべてが「自然現象」ってことになるのか・・・。小田原にある＜生命の星・地球博物館＞で「コレは蟹の仲間で、アレは蟹の仲

間ではない」という解説を「ふーん、そうなの」と眺めていると、池ちゃんは「人間が勝手に分類しているだけだからね」と言っていたけれど（・・・まぁ「蟹か否か」なんて分類をされても、おそらく当事者からしたら「余計なお世話」でしかなくて、「『美味しい！』と捕獲されるかどうか」の方が死活問題ですね）、環境の中から「人間社会」を恣意的に切り取ろうとしたりしないで、人間は環境によってアフォードされて行動しているだけだと J. J. ギブソン風に考えれば、生物学も紛れもなく「自然科学」ってことになりますね！　・・・あれ？　でも、そうすると今度は「社会科学」って何でしょう？という問いが出てきてしまいますね…。

ＡＩではなく、＜池田チルドレン＞のお兄ちゃん、社会学者の松井さんにも「自然科学」と「社会科学」の違いについて訊いてみたら、「再現性があるかどうか」という別の観点を教えてくれたのだけれど、この観点から言っても、生物学の扱う対象がマクロであればあるほど、再現性がなくなっていくような…？　松井さんも「そう、実験室の中での研究かどうかで変わってくるよね」とのこと。・・・やっぱり、生物学自体が「自然科学」なのかアヤシイから、ラマルクやダーウィンの進化論からスペンサーの社会進化論が派生して、自然選択説が適者生存の理論になっていき、挙げ句の果てには優生学なんてものにまで利用されていってしまうのかな？


ラマルク(1744 年~1829 年)

ところで、「自然科学」と「社会科学」の区別の前に「科学」って何だったっけ・・・？　またわからなくなってきた・・・　今度、W部さんがご紹介くださった本も参考にさせてもらいながら、『数字を使っていれば科学なのでしょうか？』みたいなタイトルでこのコーナーの原稿を書こうかな？　これまでのような懐かしい古典を振り返る回も交えつつ・・・　どうでしょう、池田編集長＆このコーナーの読者の皆さん？（W部さんだけでなく、広島のK野さんも、なにかリクエストがありましたら、ご遠慮なく池田編集長にご一報くださいね！）

【追悼】　アクションニュースに書くことなのか…迷いましたが、やっぱり書くことにしました。池田編集長のお父様、11 月 8 日にご逝去された池田民也さんのこと。私は民也さんと直接お会いする機会はないままでしたが、いつも色々なエピソードで笑わせてくれる民也さんのファンでした。特に「恵美子さんのこと、民也さんはどれだけ大好きなの？！」と笑ってしまうエピソードを池田編集長から聞くのが私は好きでした。民也さんと恵美子さんのご子息は、独り言を書いていると、沢山の人が集まってきて…お二人に似て、みんなから慕われていますよ。民也さんのご冥福をお祈り申し上げます。


奄美の素材で作ったシーサーと貝殻小物です。
市民望年会(12 月 27 日)で販売します！

【編集後記】
月刊誌は例えば２月号は１月に出るというわけで、それに倣うべく、今号で調整しました。年末年始に当たることから、1 月 1 日発行が難しいので、10 日発行に今号から切り替えました。私的事情もあって原稿依頼とかも上手く進まず、今号、多分次号も、ページ少なめになるかと思います。なお、今回、［コラム　父と戦争・戦後］を収録しましたが、いろんな人に「家族と戦争・戦後」をテーマに執筆をお願いできたらと思っています。